

現地を訪問して思うこと

村上 朗（1987・文）

今回のツアーに参加した大きな理由は、3年半が経過して被災地がどのように復興が進んでいるのか、直接肌で感じ、考え、行動を起こすことだった。今までなかなか訪れる機会がなく、岩手県を訪ねるのは小学生の時家族旅行で、あの陸前高田のユースホステルに宿泊し高田松原を散策して以来約40年ぶりである。東日本大震災についての様々な情報を見聞きしてきたが、現地で直接感じた衝撃は比較できないほど大きかった。

あの日から3年半が経過し、マスメディアに取り上げられる機会も減っている今、現地は考えていたより復興が進んでいない地域が多かった。また、復興の様子や現地の人々の生活の様々な苦労について多くのことを学んだ。

一番印象に残っているのは、陸前高田のガイドの菅野コハルさんのお話だった。「残酷よりひどい言葉があったら、教えていただきたい。その言葉こそ被害の状況を表せる」とおっしゃっていた。被害状況や惨状を語るだけでなく、災害の恐ろしさと対処、減災に役立てて欲しいという願いが心から伝わってきた。被災者の語り部としてマイクを握ってどれだけの経験をされたのか、お話しされることのつらさは想像できないが、その想いを伝える言葉のインパクトの大きさを実感することができた。テレビや書物と違って、直接「見て、聞いて、感じた」ことで、より具体的に自分も行動していきたいと強く思った。

また、勉強会では、先輩校友の鈴木さんに貴重なお話を伺った。ゆっくり淡々とお話しされる中に、当時の大変な状況がまざまざと伝わってきた。その後の交流会では、多くの方と美味しい郷土料理を堪能しながら楽しく過ごすことができた。懐かしさや立命館の持つ絆を感じながら、久しぶりの校歌を本当に気持ちよく歌った。

最後に、今回の貴重な経験から自分にできることを再認識し、身近なところから自分に感じたことを伝えていきたいと思う。また、これを機に現地に足を運び続けたい。